



三 国 志 I

今鷹 真 訳
井波律子

世界古典文学全集

筑 摩 書 房

三国志 I

世界古典文学全集 第24卷A

昭和52年 7 月30日第一刷発行

訳 者	今 鷹 真 井 波 律 子
発 行 者	井 上 達 三
発 行 所	株式 筑 摩 書 房 会 社

東京都千代田区神田小川町2-8
振替東京 6-4123 電話(291)7651
郵便番号 101-91

(分類) 0322 (製品) 20324 (出版社) 4604

目次

三 国 志 I

今鷹真
井波律子 訳

魏 書

武帝紀第一

文帝紀第二

明帝紀第三

三少帝紀第四

齊王紀

高貴鄉公紀

陳留王紀

后妃伝第五

武宣卞皇后紀

文昭甄皇后紀

文德郭皇后紀

明悼毛皇后紀

明元郭皇后紀

董二袁劉伝第六

董卓伝 (付、李傕・郭汜伝)

袁紹伝 (付、袁譚・袁尚伝)

袁術伝

劉表伝

呂布臧洪伝第七

呂付伝 (付、張邈・陳登伝)

臧洪伝 (付、陳容伝)

二公孫陶四張伝第八

公孫瓚伝

陶謙伝

張楊伝

公孫度伝 (付、公孫康・公孫恭・公孫淵伝)

張燕伝

張繡伝

張魯伝

諸夏侯曹伝第九

夏侯惇伝 (付、韓浩・史渙伝)

夏侯淵伝

曹仁伝 (付、曹純伝)

曹洪伝

曹休伝 (付、曹肇伝)

曹真伝 (付、曹爽・曹叅・曹訓・何晏・鄧颺・丁謐・

畢軌・李勝・桓範伝)

夏侯尚伝 (付、夏侯玄伝)

荀彧荀攸賈詡伝第十

荀彧伝 (付、荀惲・荀彪・荀翼伝)

荀攸伝

177 162 162 160 159 156 151 148 148 141 127 114 114 88 53 5

311 297 297 285 271 270 269 266 263 260 260 255 254 254 243 242 238 229 229 222 210 210 201 198

賈詡伝

袁張涼国田王郅管伝第十一

袁渙伝

張範伝（付、張承伝）

涼茂伝

国淵伝

田疇伝

王脩伝

郗原伝

管寧伝（付、王烈・張鋹・胡昭伝）

崔毛徐何邢鮑司馬伝第十二

崔琰伝

毛玠伝

徐奕伝

何夔伝

邢顗伝

鮑勛伝

司馬芝伝（付、司馬岐伝）

鍾繇華歆王郎伝第十三

鍾繇伝（付、鍾毓伝）

華歆伝

王朗伝（付、王肅・孫叔然伝）

程郭董劉蔣劉伝第十四

程昱伝（付、程曉伝）

郭嘉伝

417 412 412 396 390 381 381 376 374 373 369 369 366 359 359 342 338 333 329 328 327 326 323 323 315

董昭伝

* 劉曄伝

蔣濟伝

劉放伝（付、孫資伝）

劉司馬梁張溫賈伝第十五

劉馥伝

司馬朗伝

梁習伝

張既伝

溫恢伝

賈逵伝

任蘇杜鄭倉伝第十六

任峻伝

蘇則伝

杜畿伝（付、杜恕伝）

鄭渾伝

倉慈伝

地 図

小南一郎

488 485 472 469 468 468 460 460 453 451 448 446 446 439 434 427 422

三
国
志
I

凡 例

- 一、テキストは一九五九年十二月、中華書局刊行の標点本を用い、その他の諸本を参考にした。
- 一、句読・段落は原則として標点本に従った。裴松之の注も標点本に倣い、「一」「二」「三」……の付号をつけて段落の後に附いた。陳寿の文の流れを重んじたためである。
- 一、訳注は（一）（二）（三）……の付号をつけて各巻の最後にまとめたが、簡単な注は（ ）に入れて訳文のすぐあとに附いた。
- 一、干支の下に注記した日には、陳垣の『廿二史朔閏表』による。なおすべて旧暦である。
- 一、官職・裴松之の引用書・人名など、第三巻の付録に載せるものは、原則として注記しなかった。
- 一、裴松之の注のうち、音注は原則として省いた。
- 一、訳文のうち原文を補って訳した箇所には「」を付し、原文の訳と区別した。
- 一、本巻の訳注は、第一―第二および第十一―十六を今鷹真が、第三―第十を井波律子が担当した。

魏書

武帝紀第一

太祖武帝は、沛国譙県の人である。姓は曹、諱は操、字は孟徳といふ。前漢の時代宰相をつとめた曹参（?—前一九〇）の子孫である。桓帝の時代（一四六—一六七）、曹騰が中常侍・大長秋となり、費亭侯に封ぜられた。養子の曹嵩が爵位をつぎ、太尉の官にまで出世したが、彼の出自については明確にできない。曹嵩は太祖を生んだ。

（一）『曹騰伝』にいう。太祖は一名を吉利といい、幼時の字を阿瞞といった。

王沈の『魏書』にいう。彼の先祖は黄帝から出ている。高陽の時代に、陸終の子で陸安という者がいて、彼が曹の姓を名のつた。周の武王は殷を滅ぼしたあと、先代の天子たちの子孫を保護し、曹佚を邾国に封じた。邾国は春秋の時代に諸国の同盟會議に参加したが、戦国時代に入ると楚國に滅ぼされた。子孫はちりちりになって流浪し、その中に沛に居住した者がいた。漢の高祖が挙兵したとき、曹参は功績によって平陽侯に封じられた。代々爵位封土を継承し、一度断絶したがまた復興した。現在に至るまで嫡系の子孫は容城に領地をもっている。（二）司馬彪の『統漢書』にいう。曹騰の父曹節は字を元偉といひ、平素より温情深い人と評判が高かった。近所の家で豚がいなくなり、その豚は曹節の家の豚とよく似ていた。男は門口まで来て自分の豚だ

と主張した。曹節は口論しなかった。その後、逃げた豚がひとりでの家に帰って来た。豚の持主は大いに恥じり、自分のものとした豚を返し、同時に曹節に陳謝した。曹節は笑いながら受けた。このことから村の人々は彼を尊敬し感嘆した。曹節の長男は伯興、次は仲興、次は叔興といひ、騰は「末子で」字を季興といひた。年少のころ、黄門の從官に任命された。永寧元年（一二〇）、鄧太后（當時の皇帝安帝の先代和帝の皇后）が黄門令に詔勅を下し、中黄門（宦官、比三百石）の從官の中から年少の温厚謹嚴な人物を選び出させ、皇太子（のちの順帝）の学友としたとき、曹騰はその一人に選ばれた。皇太子はとりわけ曹騰に親しみと愛情をもち、彼に与えられる食事や下賜品は他の連中と違っていた。順帝が即位すると（一二五）、彼は小黄門（六百石）となり、中常侍・大長秋にまで昇進した。宮中に仕えること三十余年に及び、四人の皇帝（安帝・順帝・冲帝・質帝）に次々と仕えたが、一度も落度がなかった。すぐれた人物をひきたてることが好きで、けつして悪口をいったり被害を与えたりすることがなかった。彼が推挙した人物のうち、陳留の眞放・辺韶、南陽の延固・張温、弘農の張奐、潁川の堂谿典らは皆、高官に出世したが、恩きせがましい態度をとらなかつた。蜀郡の太守が計吏（会計報告に都に登る地方官）を使って曹騰に敬意を表したとき、益州の刺史种暠は函谷関における取り調べでその文書を手に入れ、蜀郡の太守を告発するとともに曹騰を内臣でありながら外部と通交しておりけしからぬ行為であると上奏し、免職にして裁判にかけていたきたいと申請した。帝は、「文書は外から来ているのであって、曹騰の書面が出されているわけではないから、彼の罪ではない」といって、种暠の奏聞を却下した。曹騰はそのことを意に介さず、つねに种暠を称賛し、种暠はおかみに仕える際の節義を心得ていると述べた。种暠はのちに司徒（宰相）となったが、「今日公（三公）となれたのは、曹常侍のおかげだ」と人に語った。曹騰の行為はすべてこういったたぐいのものであった。桓帝が即位すると（一四六）、曹騰は先帝以来の旧臣であり忠孝ともに

顯著であるというので、費亭侯に封じられ、特進の位を与えられた。^①
 太和三年（魏の文帝の年号、二二九）、高皇帝と追尊された。

〔三〕『統漢書』にいう。曹嵩は字を巨高という。性格はまじめで慎しみ深く、つねに忠孝の念を忘れなかった。司隸校尉となったが、靈帝（一六七—一八九）は大司農・大鴻臚に拔擢し、崔烈に代えて太尉にとりたてた。黄初元年（魏の文帝の年号、二二〇）、太皇帝と追尊された。

呉の人の著作である『曹瞞伝』と郭頒の『世語』ではともにもいう。曹嵩は夏侯氏の子で、夏侯惇の叔父である。太祖は夏侯惇に対して従父兄弟に当る。

太祖は若年より機智があり、権謀に富み、男立て気取りでかつて放題品行を整えることはしなかった。したがって世間には彼を評価する人は全然いなかった。ただ梁国の橋玄と南陽の何顥だけが、彼に注目した。橋玄は太祖に向っていった、「天下はまさに乱れんとしている。一世を風靡する才能がなければ、救済できぬであろう。よく乱世を鎮められるのは、君であろうか。」二十歳のとき、孝廉に推挙されて郎となった。洛陽北部尉に任命され、頓丘の令に昇進し、中央に呼び戻されて議郎に任じられた。^②

〔一〕『曹瞞伝』にいう。太祖は若いころ、鷹を飛ばし犬を走らせて狩をすることが好きで、限度のない遊蕩ぶりだった。彼の叔父はたびたびそのことを曹嵩に語った。太祖はそれを厄介に思っていた。その後、道で叔父に出あった。そこでわざと顔をくずし、口をねじまげて見せた。叔父は不審に思ってそのわけを訊ねると、太祖は、「突然、ひどい麻痺症にかかりまして」といった。叔父はそのことを曹嵩に知らせた。曹嵩は仰天して太祖を呼びつけたが、太祖の口の様子はもとのとおりだった。曹嵩は訊ねた、「叔父さんは、おまえが麻痺病にかかったといってたが、もうなおったのかね。」太祖「全然麻痺になんかかかっておりませんよ。ただ〔私が〕叔父さんのお気にめさないもの

ですから、でまかせをいわれただけです。」曹嵩は疑念を抱いた。以後、叔父が何か知らせて来ても、曹嵩はまるっきり信用しなかった。太祖はその結果いよいよ思いどおりになるまうことができた。

〔二〕『魏書』にいう。太尉の橋玄は人物を識別する能力があると評判高かったが、太祖を見ると評価していった、「わしはすいぶん天下の名士にあった。が君のような者ははじめてだ。君は自分を大切にしないよ。わしは年をとった。妻子をよろしく頼みたいものだ。」このことから名声はますます高くなった。

『統漢書』にいう。橋玄は字を公祖といい、厳正公明で才略があり、人物の鑑識にすぐれていた。

張璠の『漢紀』にいう。橋玄は内外の職を歴任し、剛毅果断によって評判をとり、謙虚な態度で士にへりくだり、王爵や親戚・個人の關係で動かされなかった。光和年間（靈帝の時代）に太尉となったが、長わづらいを理由に辞職を命じられ、太中大夫に任じられ、なくなった。家は貧しく財産もほとんどなく、ひつぎを安置する場所もなかった。当時の人はそのために名臣としてたたえた。

『世語』にいう。橋玄は太祖に向っていった、「君にはまだ名声がない。許子将とつきあうとよいだろう。」太祖はそこで許子将を訪れ、許子将は彼を受け入れた。それから名まえが知られるようになった。^③

孫盛の『異同雜語』にいう。太祖はあるとき中常侍張譲の邸宅にこっそり侵入した。張譲はそれに気がついた。そこで「太祖は」庭の中で手にもった戟をふりまわし、土塀をのり越えて逃げ出した。人並みはずれた武技で、誰も彼を殺害できなかった。ひろく種々の書物を読んだが、とりわけ兵法好きで、諸家の兵法の選集を作り「要」と名づけた。また孫武の兵法十三篇（孫子）に注した。いづれも世間に伝わっている。あるとき許子将に、「わたしはどういう人間でしょうか」と質問したことがあった。許子将が返事をしないでいると、あくまでも訊ねた。許子将はいった、「君は治世にあっては能臣、乱世にあっては姦雄だ。」太祖は哄笑した。

〔三〕『曹瞞伝』にいう。太祖は尉の役所に入るとまず四つの門を修理させた。五色の棒を作らせ、門の左右にそれぞれ十余本ずつ吊りさげ、禁令に違反する者がいると、権勢のある者でも遠慮せず、すべて棒でなぐり殺した。その後数カ月して、靈帝が目をかけていた小黃門の蹇碩の叔父が「禁止されている」夜間の通行を行なったので、即座に殺した。首都（洛陽）では夜間外出が跡を断ち、禁令を犯す勇氣のある者はなかった。近習や寵臣たちはみな彼を憎んだが、しかしつけこむ隙がなかった。そこでいっしょになって彼を称揚し推挙し、そのために昇進して頓丘の令となったのである。

〔四〕『魏書』にいう。太祖の従妹の夫である遼疆侯の宋奇が処刑され、連坐して免職となった。その後、古学に明るいという理由でふたたび召し出されて議郎に任命された。それより前、大將軍の竇武と太傅の陳蕃が宦官殺害を計画し、逆に殺された事件があった。太祖は上奏文をたてまつって、竇武らが正直でありながらわなにはまて殺され、邪惡な人間が朝廷に満ち、善良な者は出世の道を閉ざされていると述べた。その言葉はきわめて敵しかったが、靈帝は採用できなかった。その後、州や県の官吏のうち、政治に効果がなく、そのために住民から批判の流言や歌謡をあびている者を摘発して罷免するようにと、三府（三公の政庁）に詔勅が下された。（ところが）三公は不正邪惡で、「官吏たちは」皆、官界で起用されることを願望し、賄賂が横行した。勢力のある者は怨みを買う行為があつても摘発を受けることはなく、勢力のない者は道義を守つていてもおとしめられる場合が多かった。太祖はそのことを憎んだ。この年、天変地異があつたために、ひろく政治批判を求めた。その機発に太祖はふたたび上奏して敵しく諫言した。その内容は、三公の摘発は貴族・外戚の意向に逆らわないことを旨としているというものであった。上奏文がたてまつられると、天子は心に悟り、それを三府に示して叱責した。流言を理由に出頭させられていた連中は、皆、議郎に任命された。これ以後、政治と教化は一日一日と乱れていき、乱暴者や狡猾な者がますますはびこり、社会を破

壊する行為が数多くあつた。太祖は匡正しえないと悟り、もう二度と献策しなかった。

光和の末（一八四）、黄巾の乱が起つた。（太祖は）騎都尉に任命され、潁川の「黄巾」賊を討伐した。濟南国の相に昇進した。国には十余りの県が存在したが、貴族外戚に迎合する長吏が多く、贈賄汚職が横行していた。そこで上奏してその八割までを免職にした。衆をまどわす祭祀を嚴禁し、悪人は逃亡し、郡内はえりを正した。しばらくして召還され、東郡の太守に任じられたが就任せず、病氣にかこつて郷里に帰った。

〔一〕『魏書』にいう。長吏は貪婪に賄賂をとつたが、貴族や権勢ある者をうしろだてとしていたので、歴代の相によって告発されることはなかった。太祖が着任して全員を免職にしたと伝え聞くと、小ものも大ものも震えおののき、悪人は逃亡して他の郡へかくれこんだ。政治と教化は大に行きわたり、郡全体が浄化されよく治まった。そのむかし、城陽の景王劉章が、前漢の時代に功績をあげたことから、その領国では彼をまつる祠を立てていた。青州の諸郡は次々とそのまねをしたが、濟南がもっとも盛んで、六百余の祠があるほどだった。商人の中には、「神を迎えるために」二千斤（郡の太守・国の相）の車・衣服・供ぞろいをまね、妓樂をしつらえるものがあり、日々に奢侈はつていき、人民はそのために困窮に陥つたが、歴代の長吏には思ひきつて禁止根絶する者がいなかった。太祖は着任すると、神社をすべてとりこわし、官吏・人民に祭祀を禁止して許さなかった。政權を掌握してからは、邪惡な宗教行事を除去し、世間の淫祀はそのため絶滅することとなった。

〔二〕『魏書』にいう。そのころ、権臣が朝政を専断し、貴族・外戚はかつて放題のことをやっていた。太祖は道義にはずれてまで迎合することができず、しばしば衝突したので、一族に災難をもたらすのを気づかい、けっきょく天子の側に留まることを要請した。議郎に任命されたが、つねに病氣にかこつけ（出仕せず）、辞任して郷里に帰った。

城外に家建て、春と夏は書物を読み、秋と冬は狩猟に出かけ、自己の生活を楽しんだ。

少しのち、冀州の刺史王芬・南陽の許攸・沛国の周旌らは実力者たちと連合して、靈帝の廢位と合肥侯擁立を計画し、そのことを太祖にうちあけた。太祖は参加を拒否し、王芬らはけっこう失敗した。

〔一〕司馬彪の『九州春秋』にいう。このとき、陳蕃の子陳逸は方術士の平原の襄楷とともに王芬主催の会合に出席していた。襄楷が、「天文現象は宦官に不利です。黃門、常侍といった高官一族は滅亡するでしょう」というと、陳逸は喜んだ。王芬はいった、「そういうことならば、芬が除去去らう。」そこで許攸らと結託した。靈帝は北方の河間にある旧宅へ巡行するつもりであった。王芬らはその機会に乱を起そうと計画した。上奏して、黒山の賊が郡県を攻撃し圧迫していると述べ、軍隊を出動する許可を求めた。ちょうどそのとき、北方に赤氣がたちこめ東西にわたって空にたなびいた。太史が「陰謀があるにちがいありません。北方への巡行は不適当です」と進言したので、帝は中止した。王芬に軍隊出動を中止する勅命を下し、急に彼を召し出した。王芬は恐懼のあまり自殺した。

『魏書』は太祖の書いた王芬への拒絶の文章を載せている。「そもそも天子廢立の行爲は、天下にとって最大の不祥事です。古人には、成功失敗をはかりにかけ、事の重大性を考慮して実行に移した者があります。伊尹と霍光がそれです。伊尹は至忠のまことを胸に抱き、宰相の権勢を抛りどころとし、官僚たちの上に立っておりました。それゆえに天子廢立の手段は、計画のままに成功したのです。霍光となりますと、国家委託の任務を引き受け、王室の姻戚関係という地位を利用してきたうえに、宮廷内では皇太后の権力掌握の重みを頼りとし、宮廷外では高官たちの廢立に同調する状況が存在しました。昌邑王は即位後日が浅く、まだ貴族寵臣の与党はなく、朝廷には直言の臣乏しく、発議は側近から出ておりました。それゆえに計画は球を転がすように

円滑に実行され、行動は朽木をくだくようにたやすく成功したのです。今、諸君はいたすに先例の容易さに目をうばわれ、現在の困難さを見きわめていないのです。諸君、よく自分で検討してみてください。民衆との結びつき、仲間との連合は、七カ国の場合と比較してどうですか。合肥侯の高貴さは、呉・楚とどちらが上ですか。それなのに非常行動を起し、必勝を期待するのは、危険ではないでしょうか。」

金城の辺章と韓遂が刺史・郡守を殺害して反乱を起した。軍勢は十余万、天下は動揺した。太祖は召し出されて典軍校尉となった。たまたま靈帝が崩御し、皇太子（少帝・弘農王）が位につき、皇太后（何進の妹で靈帝の皇后）が朝議に臨席して政治をとった。大將軍何進は袁紹と宦官殺害の計画を立てたが、皇太后は聴許しなかった。何進はそこで董卓を召しよせ、皇太后に圧力をかけようとした。董卓がまだ到着しないうちに、何進は殺された。董卓は到着すると、皇帝を廢して弘農王とし、獻帝を擁立した。首都は大混乱に陥った。董卓は、太祖を驍騎校尉に任命するようにと言上し、彼と今後の事を相談したと思った。太祖はそこで姓名を変え、間道を通って東へ帰った。関所（虎牢関）を出て中牟を通過するとき、亭長に疑惑を抱かれ、梟まて連行された。まちの中に人知れず彼を見分けた者があり、頼みこんで釈放してやった。董卓はけつきよく皇太后と弘農王を殺害した。太祖は陳留に行きつくと、家財を散じて義兵を集め、董卓を滅ぼそうと計画した。冬十二月、己吾において旗あげた。この年は中平六年（一八九）である。

〔一〕『魏書』にいう。太祖はそれを聞いて嘲笑した。「去勢された宦官はいつの時代にもあつて当然のもの。ただその時代の君主は、彼らに権力や恩寵を与えてはならず、このような事態を招かないようにすべきだ。もし彼らの罪を処断するのならば、張本人を処刑すべきで、一人の獄吏で充分だ。どうしてごたごたと外にいる將軍を召しよせる必要があらう。彼らをみなごろしにするつもりになれば、事は露見するにちがいない。わしにはその失敗が目に見える。」

〔二〕『魏書』にいう。太祖は、董卓の計画は必ず失敗に終ると判断したので、けっきょく任命に応じず、郷里に逃げ帰った。数騎の供をひきつれ、旧知の間がらにある成皋の呂伯奢の家にたちよった。呂伯奢は留守で、その子どもたちは食客とぐるになって太祖をおどかし、馬と持物を奪おうとした。太祖は自から刀を手にして数人を撃ち殺した。『世語』にいう。太祖は呂伯奢の家にたちよった。呂伯奢は外出していたが、五人の子は皆、家において、主人と客のあいだの礼儀も備わっていた。太祖は自分が董卓の命令にそむいていたから、彼らが自分を始末するつもりかと疑いを抱き、剣を揮って夜の間に八人を殺害して去った。

孫盛の『雜記』にいう。太祖は彼らの用意する食器の音を耳にして、自分を始末するつもりだと思ひこみ、夜のうちに彼らを殺害した。そのあと悲惨な思いにとらわれ、「わしが人を裏切ることがあろうとも、他人にわしを裏切らせはしないぞ」といい、かくして出発した。

〔三〕『世語』にいう。中牟では太祖を逃亡者だと疑って、県に拘留した。当時、掾（属官）もまたすでに董卓よりの文書を受けとっていた。ただ功曹（功勞を司る属官）だけは心中彼が太祖であることに気がつくまいと考へた。そのため県令に進言して彼を釈放させた。

〔四〕『世語』にいう。陳留の孝廉衛茲は、太祖に家財を提供して援助し、挙兵させた。〔太祖は〕五千人の軍勢をもった。

〔初平元年（一九〇）の春正月、後將軍袁術・冀州の牧韓馥、予州の刺史孔伷、兗州の刺史劉岱、河内の太守王匡、勃海の太守袁紹、陳留の太守張邈、東郡の太守橋瑁、山陽の太守袁遺、済北の相鮑信は、同時にみな兵をあげた。軍勢はそれぞれ数万、袁紹を盟主に推挙した。太祖は奮武將軍を兼務した。〕

〔一〕『英雄記』にいう。韓馥は字を文節といい、潁川の人である。御史中丞であつたが、董卓が推挙して冀州の牧とした。当時、冀州は

人口多く裕福で、兵糧も充分だった。袁紹が「太守として」勃海にいたが、韓馥はその挙兵を恐れ、数人の従事を派遣して彼を監視させ、動きをとれなくさせた。東郡の太守橋瑁は都に在る三公から回付された公文書を偽造して州郡にまわし、董卓の罪惡を書き並べたのち、「われわれ（三公）は」追いつめられているが、自力で助かる手段がない。国家の災難を解き放ってくれる義兵を今か今かと待ち望んでいる」と書いた。韓馥は公文書を手にすると、従事たちに意見を求めて質問した。「今、袁氏を援助すべきか。董卓を援助すべきか。」治中従事の劉子惠はいつた、「今、兵をあげるのは國のためです。どうして袁だ董卓だとおっしゃるのです。」韓馥は発言のいたらなさを自覺して、恥じ入った。劉子惠はさらに述べた、「いくさというのは不吉な事からです。口火を切つてはいけません。今は人をやって他州の動きを見守らせ、行動を起す者がいれば、そのあとで同調するのがよろしいでしょう。冀州は、他の州に対して弱いとはいへませんし、他人のたてる功績も冀州の上に出ることはないでしょう。」韓馥はもっともだと思つた。韓馥はそこで袁紹に書簡を書き、董卓の惡事を述べ、その挙兵をみとめた。

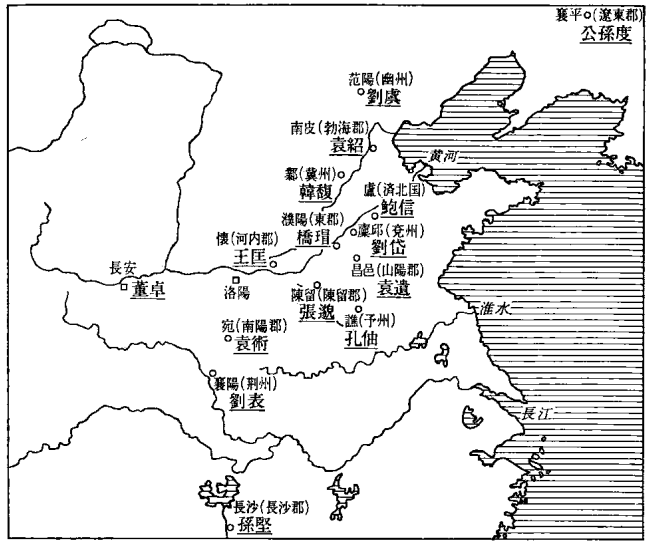
〔二〕『英雄記』にいう。孔伷は字を公緒といい、陳留の人である。

張璠の『漢紀』に董卓に対する鄭泰の進言を載せている、「孔公緒は清談高論が得意で、〔彼が息を吹きかければ〕枯木に花を咲かせ、生木を枯死させるほどです。」

〔三〕劉岱は劉繇の兄で、『吳志』に記載してある。

〔四〕『英雄記』にいう。王匡は字を公節といい、泰山の人である。財貨を輕んじ、ほどこし好きで、任俠をもって知られていた。大將軍何進の役所に招かれた。何進は割符をもたせて、王匡を徐州に派遣し、強弩五百を徵発して西方の首都へ運ばせた。たまたま何進が敗れたため、王匡は郷里へ帰った。〔のち〕平民から起用されて河内の太守となつた。

謝承の『後漢書』にいう。王匡は若いころ、蔡邕と仲がよかった。



反董卓に立ち上った諸侯

その年、董卓の軍にうち破られ、泰山に逃げ帰った。つわものをかり集め数千人を手に入れた、張邈と合流するつもりだった。王匡は以前執金吾の胡母班を殺害したが、胡母班の親族は憤激をおさえきれず、太祖と勢力をあわせ、協力して王

匡を殺害した。

(五)『英雄記』にいう。橋瑁は字を元偉といい、橋玄の一族で子の世代に当る。以前、兗州の刺史であったが、非常に威厳と恩情があった。

(六)袁遺は字を伯業といい、袁紹の従兄に当る。長安の令となった。河間の張超は太尉の朱儁に袁遺を推薦したことがあるが、そのとき、袁遺を称揚して述べた、「世間に冠絶した美德、時代を動かす器量をもち、その誠実公明さは、まことに天が与えたもうたものです。書籍を網羅し、百家を総合し、高処に登ってよく詩を作り、事物を識別し

てその名を知るといった点になりますと、現代に探し求めることは困難で、匹敵する者はございません。」そのことは『張超集』に載せられている。

『英雄記』にいう。袁紹はのちに袁遺を起用して揚州の刺史としたが、袁術にうち破られた。太祖は「成長してからよく学問に励む者は、ただわしと袁伯業とだけだ」とたたえた。その言葉は魏の文帝の『典論』に載っている。

(七) 鮑信のことは、子の「鮑勛伝」を参照のこと。

二月、董卓は挙兵のことを聞くと、天子を移居させて長安を都とした。董卓はそのまま洛陽に駐屯していたが、けっきょく宮室を焼き払った。この時、袁紹は河内に駐屯し、張邈・劉岱・橋瑁・袁遺は酸枣に駐屯し、袁術は南陽に駐屯し、孔伋は潁川に駐屯し、韓馥は鄴にあった。董卓の軍が強力なので、袁紹らはあえて先頭をきって進軍しようとしなかった。太祖はいった、「正義の軍を起して暴乱をこらしめるのだ。大軍勢がすでにせいぞろいしているのに、諸君は何をためらっているのか。先に山東拳兵の報に接した董卓が、王室の權威を頼りとし、二周の要害を根拠とし、東方に氣をくばりつつ天下を支配したならば、たとえ道義にはずれたやり方で事を行なったとしても、なおなかなか厄介だった。今、宮室を焼きはらい、むりやりに天子をお移しし、四海の内はゆれ動いており、どうおちつくかわからぬ。これこそ天がやつを滅亡させる機会ですぞ。一度の戦いで天下は定まらう。のがしてはいかんのだ。」かくて兵をひきつれ西へ向い、成皋(の要害)を占拠しようとした。張邈は、將軍衛茲に兵を分け与えて太祖に随行させたが、潁陽の汴水まで来ると董卓の將軍徐榮と遭遇した。交戦したが負けいくさとなり、士卒に多数の死傷者を出した。太祖は流れ矢に当り、乗っていた馬は傷を受けた。從弟の曹洪が自分の馬を太祖に与えたので、「太祖は」夜にまぎれて逃れ去ることができた。徐榮は、太祖のひきいる軍が数少ないのに、一日中力の限り戦ったのを見て、酸枣はまだ容易に攻めきれないと判断し、

やはり兵をひきつれ帰還した。

太祖は酸臯にたどりついたが、諸軍の兵十余万は、毎日酒盛りの大会議を開いており、積極的に攻勢に出るつもりはなかった。太祖は彼ら（將軍たち）の責任を追及したうえで、計略を立てていった。「諸君、私の計略を聞いてくれ。勃海（太守袁紹）は河内の軍勢をひきつれて孟津に臨む。酸臯の諸將（張邈・劉岱・橋瑁・袁遺と曹操）は成臯（要害のまち）を固め、敖倉を占拠し、輶轅・太谷（の街道）をふさぎ、その險要の地を完全に制圧する。袁將軍（袁術）は南陽の軍をひきいて丹・析に陣を置き、武関から侵入して、三輔をゆるがす。皆、墨壁を高く深くし、交戦してはならない。どんな疑兵をくり出し、天下の趨勢を示したうえで、順（道義に従うもの）をもって逆（道義に逆らうもの）を計つならば、たちまちのうちに平定できよう。今、軍は正義を旗しるしに行動を起しているのだ。このままためらって進軍しないとなると、天下の期待を裏切ることになる。ひそかに諸君のために恥かしく思うのだから」張邈らはこれを採用しなかった。

太祖は軍兵が少ないので、夏侯惇らと揚州に赴き、兵を募集した。

〔揚州の〕刺史陳温と丹陽の太守周昕は四千余人の兵を与えてくれた。龍亢まで引き返してくると、士卒の多数が反乱を起した。銓・建平に到達するまでに、ふたたび兵を收容して千余人を手に入れ、進軍して河内に駐屯した。

〔一〕『魏書』にいう。兵士は反乱を計画し、夜中に太祖の軍幕を焼いた。太祖は剣を手数十人を殺したので、残りの者は皆おそれをなして道を開いた。そこで軍營を脱出することができた。兵士のうち反乱にくみしなかった者は五百余人だった。

劉岱と橋瑁とは仲が悪く、劉岱は橋瑁を殺害し、王肱を東郡の太守の役につけた。

袁紹は韓馥と共に謀して幽州の牧劉虞を立てて皇帝としよう企てたが、太祖はそれを拒絶した。袁紹はまた一つの玉印を手に入れたことがあり、

太祖のいる席上でその肘へ向ってあげて見せた。太祖はそれに対し笑ってはいたが心中憎悪した。

〔一〕『魏書』に袁紹に対する太祖の返書を書いている。「董卓の罪は、四海に暴露されております。われわれが大軍勢を集め、正義の軍を起した結果、遠きも近きも響きが音声に応ずるように呼応しないものはありませんでした。これは、正義によって行動しているからこそです。今、幼き天子は微弱で、姦臣に制御されておりますが、昌邑王の如く国家を滅亡にみちびくさしがあるわけではありません。それなのに、にわかに交代させますと、天下の人々はいったい平氣でおれましようか。諸君は（劉虞のいる）北方を向きなさい。私は（獻帝のおられる）西方を向いておりますからね。」

〔二〕『魏書』にいう。太祖は笑いとばした、「わしは、おまえさんのいうとおりにはならないよ。」袁紹はまたも人をやって太祖を説得させて、「今袁公は、勢いは盛大、軍は強力、二人の子はすでに成長しております。天下の英傑たちのうち、彼以上のものがありましようか。」太祖は返答をしなかった。このことがあってから、いよいよ袁紹には私欲があると判断し、彼をうち滅ぼすことを計画した。

二年（一九一）春、袁紹と韓馥はついに劉虞を皇帝に擁立したが、劉虞はあくまでも引き受けることを承知しなかった。

夏四月、董卓は長安に引きあげた。

秋七月、袁紹は韓馥を脅して、冀州を奪った。

黒山の賊于毒・白繞・眭固ら十余万の軍勢が魏郡を攻略した。東郡の〔太守〕王肱は防禦しきれなかった。太祖は兵をひきつれ東郡に入り、濮陽において白繞を攻撃し、これをうち破った。袁紹はそこで太祖の東郡太守任命を上奏し、東武陽に陣を置かせた。

三年（一九二）春、太祖は頓丘に陣をおいた。于毒らは（そのすきに）東武陽を攻撃した。太祖はそこで兵をひきつれて西方に向い（黒山に入り、于毒らの本拠地を攻撃した。于毒はそれを聞くと、武陽を放

置して引き返した。太祖は睦固を待ち伏せて攻撃し、また匈奴の於夫羅を内黄において攻撃し、いずれも大勝した。

〔一〕『魏書』にいう。将校たちは皆、救助に引き返すべきだと主張したが、太祖はいった、「孫臏（孫子）は趙国を救うために（趙に派兵した）。魏の本国を攻撃した。耿弇（後漢の光武帝の功臣）は西安に向う目的で（まず）臨菑を攻撃した。賊はわが軍が西に向ったと聞けば引き返すであらう。武陽は自然と危機を脱する。引き返さなければ、わが軍は敵の本拠地を破ることができし、やつらも絶対に武陽を陥落させることはできぬ。」かくて進軍した。

〔二〕『魏書』にいう。於夫羅というのは、南匈奴の単于（王）の子である。中平年間に匈奴の兵を徴発したとき、於夫羅は統率者として漢を援助した。たまたま本国に反乱が起り、南単于が殺された。於夫羅はそのままその軍勢をひきいて中国に留まった。天下の動乱につけこみ、西河の白波の賊（西河県の白波谷に起った黄巾の一派）と合流し、太原・河内を破り、諸郡をあらしまわって乱暴をはたらいていた。

夏四月、司徒の王允は、呂布と共に謀して董卓を殺害した。董卓の將軍李傕と郭汜らは、王允を殺害し、呂布を攻撃した。呂布は負けて東に向い、武関を出た。李傕らは朝政を思いのままに動かした。

青州の黄巾の軍勢百万が兗州に侵入し、任城国の相鄭遂を殺害し、方向を転じて東平に侵入した。劉岱はそれを攻撃するつもりであったが、鮑信は諫めていった、「今、賊の軍勢は百万、人民は皆おそれおのき、士卒は戦闘意欲をなくしており、相手にかかりません。賊の軍勢を観察すると、秩序もなく仲間同士が雑然と連なり、軍には輜重もなく、ただ略奪によってかてを得ているだけです。今は軍士たちの力をたくわえ、まず守りを固めるのがいばんかと存じます。やつらは戦いたくても戦えず、攻撃してもまたうまくゆかず、なりゆきからいって離散するにちがいありません。そのあとで精銳を選び、要害の地を占拠し、やつらを攻撃すれば、破ることができましょう。」劉岱は従わず、けっきょく彼

らと合戦し、案の定殺されてしまった。鮑信はそこで州吏の万潜らとともに東郡に赴き、太祖を迎えて兗州の牧を引き受けさせた。（太祖は）かくて兵を進めて寿張の東において黄巾を攻撃した。鮑信は力の限り戦って戦死したが、やつらのことで敵をうち破った。鮑信の遺体を賞金を出して求めたが得られなかった。人々はそこで鮑信の姿に似せて木を刻り、それを祭って哭礼を行なった。黄巾を追って済北まで行くと、（黄巾は）降伏を願ひ出た。冬、降兵三十余万人と（兵卒以外の）男女あわせて百余万人を受け入れた。そのうちの精銳を吸収して、青州の兵という称号をつけた。

〔一〕『世語』にいう。劉岱が死んだのち、陳宮は太祖に向っていった、「兗州には現在あるじがありません。しかも天子からの命令は断ち切れております。私は州内を説得したいと存じます。明府（太守）にはあとから行かれてその地を治めてください。それをもとでとして天下を取ちなさいませ。これこそ霸王の業です。」陳宮は別駕や治中を説得した、「今、天下は分裂しているのに、（兗州）にはあるじがない。曹東郡（太守）は世に名だたる才能の持主ですぞ。もし迎え入れて州を治めさせれば、民草を静めるにちがいありません。」鮑信らもそのとおりだと考えた。

〔二〕『魏書』にいう。太祖は歩兵と騎兵あわせて千余人をひきつれ、戦場を巡視していたとき、不意に賊の陣営に行き当った。戦鬪は不利で数百人の死者を出して引き返した。賊はつづいて前進して来た。黄巾は永年の間、反政府の軍事活動をしており、勝ちいくさに乗じた経験も何回となくあり、兵はすべて精悍だった。太祖のほうは、もとからいる兵士は少なく、新しく加わった兵士は訓練されていなかったのので、軍をあげて皆、恐懼をきたした。太祖は胄をかぶり甲をまとい、親しく將兵を巡察し、明確な賞罰によって士気を励ました。人々はそこでふたたび奮いたち、すきをついて攻撃をしかけ、賊軍は次第にうち破られて退いた。賊軍はやむなく太祖に文書を送って述べた、「昔（あなたは）済南におられたとき、神壇を破壊されましたが、その道

は中黄太乙と同じであり、道をご存知のように見受けられましたのに、今は前とかわって惑乱しておられます。漢行はすでに尽きており、黄家が立つのが当然であります。天の下す大きな運命ですから、あなたの才能力量で「漢を」存続させることは不可能ですぞ。太祖はその檄文を見ると、となりつけ、たびたび降伏への路を開示してやった。かくて敵の意表をつく伏兵を設け、昼も夜も戦いを交え、戦闘のたびごとに敵をとらえ、賊軍は退却した。

袁術は袁紹と仲たがいをした。袁術は公孫瓚に救援を要請した。公孫瓚は劉備を高唐に、単経を平原に、陶謙を兗州に駐屯させ、袁紹を圧迫した。太祖は袁紹と協力して「彼ら」を攻撃し、すべてうち破った。

四年（一九三）春、鄆城に陣を置いた。荊州の牧劉表は袁術の糧道を絶った。袁術は軍をひきいて陳留郡に入り、封丘に駐屯し、黒山の殘賊と於夫羅らが彼を助けた。袁術は將軍の劉詳を匡亭に駐屯させていた。太祖は劉詳を攻撃し、袁術が救援にかけつれると、合戦して大いにこれのうち破った。袁術は退却して封丘を守った。かくて彼を包囲したが、包圍網ができあがらないうちに、袁術は襄邑に逃走した。追撃して「襄邑を破り袁術の逃げこんだ」太寿まで来ると、掘割りの水を決潰して城にそそいだ。「袁術は」寧陵に逃走したので、またそれを追撃すると、「袁術は」九江に逃走した。夏、太祖は引き返して定陶に陣を置いた。下邳の闕宣が軍勢数千人を集め、天子と自称した。徐州の牧陶謙は彼と手を結んで兵をあげ、泰山郡の華と費を奪い、任城を攻略した。秋、太祖は陶謙を征討し、十余城を陥落させたが、陶謙は城を固守してあえて出撃しよとしなかった。

この年、孫策は袁術の指示を受けて長江を渡ったが、数年の間に江東（長江下流の地域）を手中に収めてしまった。

興平元年（一九四）春、太祖は徐州から帰還した。そのむかし、太祖の父の曹嵩は官を離れたのち「故郷の」譙に帰っていたが、董卓の乱が起きたときに瑯邪へ避難し、陶謙によって殺害された。そのため太祖は

復讐を志して東へ討伐に赴いたのである。夏、荀彧と程昱に鄆城を守備させ、ふたたび陶謙を征討し五城を陥落させ、そのまま土地を攻略しつつ東海まで行った。帰還の途中鄆城を通過した。陶謙の將曹豹は劉備とともに鄆の東に駐屯しており、太祖を迎え撃った。太祖は彼らを撃破し、さらに進んで襄陽を攻略した。通過した地域では多数の者を虐殺した。

〔一〕『世語』にいう。曹嵩は泰山の華界に滞在していた。太祖は泰山の太守応劭に命じて兗州まで家族を送って来させることにした。応劭の兵がまた「華界に」行きつかぬうちに、陶謙はひそかに数千騎を派遣して「家族を」逮捕させた。曹嵩の家族は応劭の迎えだと思ひこみ、警戒をしていなかった。陶謙の兵はやって来ると、太祖の弟の曹徳を門の中で殺した。曹嵩は恐怖し、裏の土塀に穴を開け、まずその妾を外に出そうとしたが、妾は肥っていて敵の来ぬうちにぬけ出ることができなかった。曹嵩は便所に逃げこみ、妾といっしょに殺され、一家全員が死んだ。応劭は恐懼し、官を棄てて袁紹のもとに身を寄せた。のちに太祖が冀州を平定したとき、応劭はすでに死んでいた。

韋曜の「呉書」にいう。太祖は曹嵩を迎えにやったが、「曹嵩の」荷物運ぶ車は百余台あった。陶謙は都尉の張闓に二百の騎兵を与えて護送させたが、張闓は泰山郡の華界と費界の間で曹嵩を殺害し、財物を奪うと、そのまま淮南に逃げた。太祖は責任を陶謙に負わせ、そこで彼を討伐したのである。

〔二〕孫盛はいう。そもそも罪ある者を討ち人民をいたわるのは、古代のよき規範である。責任は陶謙にあるのに、その支配する地域まで破壊したのはまちがっている。

たまたま張邈が陳宮とともに反逆し、呂布を迎え入れ、郡界はすべて呼応した。荀彧と程昱は鄆城を保持し、范と東阿の二界は固守していた。太祖は軍をひきいて帰って来た。呂布は到着すると鄆城を攻撃したが陥すことができず、西に向い濮陽に駐屯した。太祖はいった、「呂布はわずかの間に一州を手に入れながら、東平を根拠とし、亢父・泰山の街道

を絶ちきり、要害を利用してわが軍を迎撃することをなしえずに、なんと潁陽に駐屯しおった。わしには彼の無能がわかる。」かくて軍を進めて攻撃した。呂布は兵をくり出して戦い、まず騎兵によって青州の兵に攻めこんだ。青州の兵はくずれ、太祖の陣は混乱した。「太祖は」火をつきぬけて馳せ出たが、馬から落ち、左の手のひらをやけどした。司馬の様異が太祖を助け起して馬に乗せ、引き退くことができた。軍営にたどりつく前、諸將は太祖の顔が見えないので、皆恐懼をきたした。太祖はそこで「軍営に到着すると」無理をおして軍をねぎらい、軍中に命令して攻撃用の兵器を作るように督促し、前進してふたたび攻撃をしかけ、百余日の間、呂布と対峙した。蝗が湧き起り、人民はたいそう飢餓に苦しんだ。呂布の糧食も尽き果てたので、両者とも引きあげた。

「一」袁譚の『献帝春秋』にいう。太祖が潁陽を包囲すると、潁陽の豪族田氏が内通して来たので、太祖は城に入ることができた。その「侵入した」東門に火を放ち、引き返す意志のないことを示した。戦闘になり、軍は敗れた。呂布の騎兵は太祖を捕えたが彼だと知らずに訊ねた、「曹操はどこにいる。」太祖、「黄色の馬に乗って逃げて行くのがそうです。」呂布の騎兵はそこで太祖を放置して黄色の馬に乗った者を追いかけた。門の火はなお盛んであったが、太祖は火を突いて城を出た。

秋九月、太祖は鄆城に帰還した。呂布は秉氏に到着したが、その界の人李進に撃破され、東に向って山陽に駐屯した。そのとき、袁紹は人をやって太祖を説き伏せ、和議を結ぼうと願った。太祖は兗州を失ったばかりで兵糧も底をついていたので、それを認めようとしたが、程昱が太祖をひきとめ、太祖はそれに従った。冬十月、太祖は東阿へ赴いた。

この年、穀物は一石五十余万錢に高騰し、人間同士が食いあうほどだった。そこで軍吏や兵士の新たな募集をとりやめた。陶謙が死に、劉備が彼に代わった。

二年（一九五）春、定陶を襲撃した。済陰の太守呉資は（定陶の）南

城を保持しており、陥落させられないうちに、呂布が到着したので、今度は彼を攻撃して撃破した。夏、呂布の將薛蘭と李封が鉅野に駐屯していたので太祖は彼らを攻撃すると、呂布が薛蘭の救援にかけつけた。薛蘭は敗れ、呂布は逃走した。かくて薛蘭らを斬った。呂布はふたたび陳宮とともに万余人をひき東郷からやって来て戦闘をしかけた。当時、太祖の兵は数少なかったが、伏兵を設け、奇襲の軍を放って攻撃し、大勝利を得た。呂布は夜にまぎれて逃走した。太祖はふたたび定陶を攻撃して陥し、兵を分けて諸県を平定した。呂布は東にいる劉備のもとに走った。張邈は呂布につき従ったが、その弟の張超に命じ家族とともに雍丘を保持させた。秋八月、雍丘は陥落し、張超は自殺した。張邈の三族（父母・兄弟・妻子）を処刑した。張邈は袁術のもとに救援要請に赴く途中、部下たちに殺され、兗州は平定された。かくて東方に向い陳の地を攻略した。

「一」『魏書』にいう。このとき、兵は皆、麦を奪いに出かけており、残っている者は千人に足らず、屯営は堅固でなかった。太祖はそこで婦女子に命じてひめがきを守らせ、全兵力をあげて防いだ。屯営の西に大きな堤があり、その南は樹木が鬱蒼と茂っていた。呂布は伏兵があるかと疑念を抱き、「曹操はたくらみが多い。伏兵の中に入っているならぬぞ」といいあい、軍を引いてその南十余里の所に駐屯した。翌日ふたたび来攻した。太祖は兵を堤のうちに隠し、半数の兵を堤の外に出した。呂布がずんずん前進して来たので、軽装の兵に命じて戦闘をいどませた。合戦になると、伏兵は全員堤の上に登り、歩兵騎兵がいつせいに進撃し、大に敵をうち破った。その鼓車（陣太鼓をのせた車）を捕獲し、その陣営まで追撃してから引き返した。

この年、長安に動乱が起り、天子は東に移動したが、曹陽においてうち負かされ、黄河を渡って安邑に行幸した。

建安元年（一九六）春正月、太祖の軍は武平に攻めよせ、袁術が任命